

東京拘置所による獄殺を断じて許すな！

同志北條千秀虐殺 19カ年弾劾一報復！

全国反戦青年委員会
全日本学生自治会総連合(伍代委員長)

東京都杉並区下高井戸 1-34-9 03-3329-0165・0168 <http://zengakuren.info>

1999年1月、反戦青年委員会の同志・北條千秀が東京拘置所により虐殺された。虐殺から19カ年を経た今日、同志虐殺への怒りの炎は、さらに強く燃え上がっている。虐殺に手を染めた東拘当局、警視庁公安・検察・裁判所など加担した一切の弾圧機関に断固とした報復戦を貫徹する。そして、労働者人民への虐待・虐殺を手段とし目的とする監獄支配に風穴を開け、東拘はじめすべての監獄の解体に向け闘い抜く決意を明らかにする。

共謀罪という新たな治安弾圧の武器を手に安倍連合政府の戦争・改憲一ファシズム攻撃に拍車がかかっている。三里塚・沖縄をはじめとした労働者人民の闘いへの弾圧を駆使した破壊攻撃とともにやり返していこう。共謀罪弾圧を粉碎し、監獄、警察、検察などの治安・弾圧機関を怒りの闘いで幾重にも包囲し解体しよう。

監獄・警察・裁判所一体の千秀同志虐殺を断じて許すな

98年5月26日、北條千秀同志は、反共ファシスト宗団「明大ゴスペル」による襲撃を受け、その後高井戸署により逮捕された。肋骨骨折の重傷を負わされながらも逮捕後は完全黙秘・非転向で取調と対決した。東京拘置所移管後は、ファシストと権力・明大当局が一体となった反革命弾圧に怒りを燃やし、粉碎の決意をみなぎらせていた。

東拘や東京地裁は千秀同志の担ってきた様々な闘いを憎悪していた。とりわけ、爆取でっちあげ弾圧と対決し、東拘で長期獄中闘争を闘う北條秀輝同志を先頭で支援してきたことに憎しみを募らせ、千秀同志に攻撃を集中してきた。当時の裁判長中山隆夫は、初公判での「人定」に黙秘で挑む千秀同志をはじめとした被告団に対し、「黙秘を続けていると不利なことになりますよ」と報復感情をあ

らわにした。そして、第一回公判直後に獄外との「物の授受禁止」を加えるなど、接見禁止攻撃を強め徹底して獄外との分断をおこなってきたのである。

千秀同志は、拘禁のなかで発症した不眠や過換気症などの諸症状と格闘しながら獄中闘争を闘い続けていた。しかし、発症に目をつけた東拘当局により、医療とは名ばかりの薬漬けの状態にされていった。98年12月10日には、「薬が効かない、おかしい」と抗議する千秀同志を「保護房」へ叩き込んだ。必要な医療を要求する同志を暴力的に「保護房」に叩き込んだのである。そして還房後、懲罰審査を通告した。

このさなかに「12月14日朝に自殺を図った」と報道がされた。入浴日で看守がひんぱんに房の前を通っている中でである。東拘当局は事態発生後、

形だけの応急処置をただで長時間にわたって同志を拘置所内に放置し、救命救急医療がおこなえる病院に搬送したのは「発見」から4時間後であった。そして、その間に意識不明状態の千秀同志に二度に渡って北條秀輝同志を面会させている。

千秀同志を獄殺し、なおかつ非転向で闘う秀輝同志に獄殺恫喝一転向強要攻撃をかけようとしたのである。虐殺の下手人一東拘当局を断じて許さない。

右翼・ファシストと手打ちし、同志虐殺を容認した木元グループを解体・根絶しよう

闘う隊列から脱落・逃亡した木元グループの頭目・山田茂樹は「明大ゴスペル」を指導する韓国の国家情報院のスパイと親交し、襲撃や警察との連携を免罪した。そして権力、ファシスト宗団に屈服しファシスト弾劾・階級裁判粉碎を掲げて闘う被告団はじめ、弁護団や非妥協で闘う仲間への敵対・破壊をおこなった。千秀同志虐殺に対しては監獄支配に対する屈服を公言しながら「東拘はやることはやった」「千秀同志が限界だった」と吹聴して回り事態究明一報復戦の破壊を策動した。

反戦と全学連は東拘当局による同志虐殺を許したうえ、山田による千秀同志本人の「思想問題」へのすりかえとも対決することができなかった。当時の獄中一獄外貫く団結と闘いにおける誤りと限

界性を自己批判する。当時、自らの誤りと限界性を見据えこれを突破する闘いを作り出せなかったことが自らの隊列から木元グループを産み出す大きな要因としてあることを深く胸に刻み、千秀同志の追悼に向け「獄壁をこえる団結と闘い」を全力で作りに出していく。

ファシスト宗団から「お友達」とまで言われた木元グループは、脱落・逃亡以降は権力・資本の手先として明大生協労働者の全員解雇や、労働運動をはじめ階級闘争を先頭で闘っていた5人の同志を虐殺し、正真正銘の反革命集団へと転落した。反戦と全学連は、こうした木元グループを産み出した責任において必ずや解体・根絶する。

相次ぐ死刑執行を許すな！ 激化する治安弾圧を粉碎し、監獄解体一獄中者解放に向け共に闘おう

監獄は闘う者を屈服・転向させ、さもなければ死を強制するための暴力装置だ。一人の同志に対する攻撃は、その同志が共にする団結への攻撃でもある。反戦と全学連は、千秀同志虐殺に必ず報復する。そして、いかなる労働者人民に対する獄中暴行・拷問・「保護房」叩きこみをも許さず闘う。

何より監獄は徹底した差別・分断、拷問・虐殺を日々執行し国家の支配を維持・拡大するために存在する。それを解体・廃絶するのは戦争突撃と治安弾圧に突き進む現在の階級闘争・革命闘争の第一の課題だ。権力と真正面から闘わず、弾圧との対決を制動・妨害する勢力を踏みしだき、反彈圧の強大なうねりをともに作りあげよう。

昨年12月19日、国家一法務省と東京拘置所により2名の死刑執行が強行された。1名は事件発生時未成年であり、再審請求中であった。7月に続き再審請求中の執行が連続で強行されている。第二次安倍連合政府の始動から5年、毎年二回の執行が定例となり21名の死刑囚に対し執行が強行されてきた。

戦争突撃と天皇(制)攻撃が強まりそれを許さない闘いがまきおこるなか、政府は治安弾圧を激化させている。高まる闘いのうねりを、死刑執行を頂点とするむき出しの国家暴力でねじ伏せようとしている。死刑執行を断じて許すな！ 共謀罪をはじめあらゆる治安弾圧法を粉碎し、死刑制度を廃絶しよう。

死刑制度とともに治安弾圧の大きな装置となっているのが監獄の中の監獄一「保護房」だ。「保護房」は、「保護」と称して千秀同志や「病者」・看守に逆らう獄中者を叩き込み死に追い込んできた紛れもない虐殺房だ。安倍政府は「世界一安全な日本」政策と称して、留置場の「保護房」を増設している。闘う獄中者、そして「保安処分」と闘う「病者」と連帯し、監獄や精神病院、すべての収容施設にある「保護房」の撤廃をかちとろう。

北條千秀同志虐殺19ヶ年徹底弾劾一報復！ 東拘一全国拘置所による死刑執行を許すな！ 「保護房」撤廃！ 監獄解体一獄中者解放を掲げ全国の監獄に向け進撃しよう。